

論文内容の要約

論文名	High Prevalence of Non-psychotic Delusions in Children with High-functioning Pervasive Developmental Disorder
氏名	後藤 彩子
<p>【目的】 高機能広汎性発達障害（HFPDD）児は時に非精神病性の妄想を有し、統合失調症と誤診されやすいことが臨床的課題となっている。本研究の目的は、①HFPDD 児における非精神病性妄想の有症率を明らかにし、②HFPDD 児が他の精神障害児よりも非精神病性妄想を有することが多い、および③非精神病性妄想が抑うつや不安と関連がある、という仮説を検証することである。</p> <p>【対象】 2007 年 5 月から 2010 年 4 月に大阪市立大学医学部附属病院神経精神科外来を受診した 6 歳から 15 歳の HFPDD 児 45 名を対象とし、他の精神障害児(非 HFPDD 児)51 名を比較対照群とした。精神遅滞、統合失調症およびてんかんを有する児は除外した。</p> <p>【方法】 本研究は横断的、ケースコントロール研究である。HFPDD 診断基準は DSM-IV-TR を用いた。非精神病性妄想は半構造化面接法で、抑うつおよび不安は子どもの行動チェックリスト（CBCL）を用いて評価した。</p> <p>【結果】 HFPDD 児のうち 62.2%が非精神病性妄想を有しており、これは非 HFPDD 児(25.5%)と比べて有意に高率であった（OR:4.81、CI:2.01-11.51）。HFPDD 児のうち非精神病性妄想を有する群は有さない群に比べ、CBCL の抑うつや不安と関連する内向得点が有意に高かった（72.2 ± 7.7 vs $65.7 \pm 10.7, t=2.4, p=0.022$）。</p> <p>【結論】 HFPDD 児は高率に非精神病性妄想を有し、これは不安や抑うつと関連している。HFPDD 児における非精神病性妄想と統合失調症の妄想とは治療法が異なるため、学童に妄想を認めた場合には、広汎性発達障害の併存に留意し、妄想の正しい評価をすべきである。</p>	